第８回　府立高校の在り方ビジョン（仮称）検討会議　（概要）

１　日　　時

令和４年１月 24 日（月）午前 10 時～11 時 30 分

２　場　　所

京都産業大学むすびわざ館　３－Ａ（３階）

３　出 席 者

○委　　員　６名（欠席４名）

○教育委員会　橋本教育長、木上教育次長、山本教育監、大路管理部長、吉村指導部長、相馬高校改革推進室長、石澤総務企画課長、平野管理課長、村田高校教育課長、山田特別支援教育課長、坂田高校改革推進室参事　ほか

４　概　　要

○事務局からの資料説明

○協議

◆：座長　　○：委員　　□：教育委員会

■事務局からの資料説明

■協議（主な意見）

◆パブリックコメント等を踏まえて作成された、資料２「府立高校の在り方ビジョン（仮称）【最終案】（素案）」について、御意見をいただきたい。

○今回のパブリックコメントには、55 名・164 案件の意見があった。非常に関心が高いということであり、このような意見を少しでも反映していくということが大事である。

○今回改めて最初から最後まで読み返したときに、府立高校全体の学校数や地域ごとの設置状況、公立・私立のバランスといったことが分かる資料が無いことに気が付いた。過去の会議では資料として示されていたので、その資料が最終的に掲載された方がよいと思う。

○19 ページ【目指す方向性】③に、京都府立大学についての記述が加わっている。パブリックコメントに、京都府立大学や福知山公立大と連携すべきという意見もあったが、府立大学のみを取り上げるのは少し唐突ではないかと思う。府立高校は、海外も含め、既に府内外の幅広い大学と連携をしているという実態を踏まえる必要があるのではないか。その上で、府の政策的な要素も含めながら、府立大学に関する表現を工夫すべきであると思う。

○パブリックコメントの件数の多さに驚いた。府民が大変興味を持っているということが、数字で表れたと思う。意見の内容も納得できるものがほとんどであった印象である。そのような意

見を踏まえて最終案を短期間でまとめていただいたことに感謝する。

○14、15 ページに府立高校生のアンケートの結果が掲載されており、それに続いて「魅力を高めるための視点」が示されている。府立高校生の実際の希望や思いを土台として、府立高校の役割の再定義や魅力化を進めていこうとしているというポリシーがうかがえる。大変スムーズであり、素晴らしい視点だと思う。

○22 ページ【目指す方向性】③にある「校長の同一校における在職期間の長期化を図る」という人事に係る部分については、大事な要素だと思う。校長がビジョンを持って学校運営をしていくには、ある程度の時間・期間が必要であり、校長自身が将来的な学校のビジョンを描くことができる環境づくりにおいて、非常に重要な視点ではないかと思う。

○アンケートを根拠にした構成で説得力があり、パブリックコメントの意見も踏まえた修正がなされていると思う。

○新型コロナウイルス感染症の影響で、教育現場でもＩＣＴ化が顕著に進展している。このタイミングにあって、従来の課題を改めて見直していくことが大切だと感じている。学校でのスマートフォンの扱いについても転機を迎えており、授業の中でスマートフォンを用いてレポートや感想文を提出するというスタイルもある。オンライン、対面のいずれにおいても、今後の教育の中でＩＣＴをどのように使っていくのかという視点が重要であると感じている。

○コミュニティスクールについても方向性が示されており、中学校などの規模と同じようにはできないと思うが、京都府の地域性を活かしたコミュニティスクールならではの強みや良さを高めることができれば、素晴らしいと思う。

○パブリックコメントに多くの意見が寄せられ、保護者の意見も多くあったことは良かったと思う。検討会議は終了しても、ビジョンの実現に向け、今後教育委員会と関係機関等による実践的な協議が深まることを期待している。

○子どもたち一人一人に個性があり、多様な子どもたちを、学校がどう受け入れて、育てていき、社会に出していくか、そのバトンを次の世代へどう渡していくかという視点が大事だと思う。子どもたちのいきいきとした生命力から大人も学びながら、子どもたちを包み込む教育を目指すことが大切である。

○特別支援学校との連携に関わる方向性では、インクルーシブ教育を進めてほしいと思っている。パブリックコメントには「特別支援学校の小・中学部から高等部への系統性の中で、高等部だけを切り離すのはどうか」という反対意見もあった。特別支援学校との連携については、今後様々な関係者と協議を持ちながら、進めていくべきだと思う。しっかり声を聞きながら進めていけば、誰もがいきいきとできる学校教育、共生社会へとつながっていくのではないかと思う。

○32 ページ「Ⅳ　魅力ある府立高校づくりに向けた今後の進め方」において、「多様な生徒一人一人を大切にし、全ての生徒が夢や希望を持ち、未来に向かっていきいきと学ぶことができる、魅力ある府立高校づくりを確実に進めていく。」と前向きな表現で締めくくられており、好印象である。魅力ある府立高校に重要な要素は、「人」であると感じている。学校に入った瞬間に明るい雰囲気であったり、先生が笑顔であったり、生徒たちが楽しそうにいきいきしていたり、そのようなことが全てを物語ると思う。そこを最終目標にしながら、今後の関係者との協議も積極的に進めてもらい、学校づくりが校長に委ねられるように努めてもらいたい。

○「在り方ビジョン」については、パブリックコメントの状況からすると、府民の関心が非常に高い。それを踏まえて、良い方向性を目指していこうという思いが結集された「最終案」になっていると思う。中間案から比べて、府立高校の学校行事や特別活動、それらと学習とのバランスの良さに子どもたちが魅力を感じていること、地域との関わりが府立高校の大きな目的であり存在意義の１つであるということ、選抜制度の課題点等が新たに盛り込まれたという点で、重要な要素が盛り込まれ、良くなっていると思う。学習指導要領が新しくなり、高校側でも来年度から全面実施となる。その理念に基づいて、小・中・高と連続した学びが行えるよう、連携していける道筋がつくられればよいと思う。

○生徒の多様化に関しては、ＬＧＢＴＱについての理解を深めるなど、学校においてもきめ細やかな対応等が必要であると思う。生徒一人一人がいきいきと活躍できる教育活動においては、生徒一人一人の個性や良さなどをしっかりと尊重していく人権教育の視点が大切であると思う。そのような視点についても必要ではないか。

◆22 ページ「④　学校における働き方改革の推進」の記述において、業務の改善や適正化の視点が少し弱い気がする。教職員における業務の改善や適正化は、生徒たちの学びの充実に向けて当然必要な取組であるので、もう少し内容を充実させるべきである。

◆全般的に難しい用語を使っていないことは評価できる。しかし、読み手からすると、脚注があった方がいい語句もある。読み手が教育についてある程度知識を持っていることを前提としたものになっていると思うので、もう少し配慮をした方がよいのではないか。

◆タイトルにある「仮称」の取扱いについては、どうしていくのか。

□最終案の素案段階ということで、まだ「仮称」と付けているが、府教育委員会において議案として提出する際には、取った名称によってお諮りすることになる。

◆この検討会議も今回が最終である。最後の機会となるので、今後、京都府教育委員会としてどのような取組を期待するかなど、幅広く御提案や御意見をいただきたい。

○この「在り方ビジョン」に書かれている方向性が全て実現できれば、本当に素晴らしい府立高

校になると感じる。計画を作っておしまいということにならないように、現場の校長先生をはじめ教職員全体へのビジョンの周知徹底、広報といったことを、しっかりと行っていくことが必要である。しっかりと周知し、学校現場において実践してもらえるような、トップダウンではなくてボトムで広がっていくようなアプローチを期待する。この検討会議では、私立高校に負けない府立高校の在り方に加え、普通科とは何かなど、根源的なことも問うてきた。現時点で全ての答えが出たとは思わない。ビジョンでの計画期間は10年間だが、府立高校の在り方については、不断の問いにしていく必要があると思う。

○アンケートはとても有意義だったと思う。世論を掴んでいく中で、エビデンスベースとなる議論をしなければいけない時代である。今回の検討会議は終わりになるが、このアンケートは経年で取り続けていただきたい。１年に１回が難しければ、３年に１回でもよいと思う。どのように指標が変化していくかを見極めていくことが、教育委員会の役目だと思う。そのための予算措置なども含め、アンケートの継続をお願いしたい。

○この「在り方ビジョン」には、「探究」という言葉が約20ヶ所盛り込まれている。これからのキーワードでもあり、府立高校の強みにもなると思う。既に新学習指導要領が全面実施となっている小学校・中学校では、昨年度・今年度から始まっている。今回の検討会議では「府立高校はどう在るべきか」を議論したが、一方では「地域はどう在るべきか」という議論もあった。小学校・中学校・高校という連続性をどのようにデザインしていくのかという議論も大事だと思う。今回は部分的にしか議論を行っていないが、地域には地域の事情がそれぞれある。地域の教育委員会との対話やビジョン形成について、京都府教育委員会から仕掛けていただきたい。小・中・高・大がつながるような教育、そして地域づくりの仕掛けを、今後ぜひともお願いしたい。

○学校も教育委員会においても、現状維持で済まされることは多くあると思うが、現状維持は後退だと思っている。現状維持を打破して、新しいことを考え、創っていくという、今回の府立高校の在り方検討の姿勢は評価できる。府立高校は大きな存在として、その役割を果たしていただきたい。

○学校現場の教員の大きな悩みの１つが、「どうすれば生徒が学習への意欲を持てるか」ということである。子どもたち自身に「学ぶことの目的」や「夢」があるかが重要であると思う。今は主体的な学びが求められており、そういった目的や目標、夢を持って子どもたちが勉強することが大事だと思うが、放っておいても夢や目的は持たない。学校や教育委員会にできることは、「体験する場を設ける」ことだと思っている。幼稚園、小学校、中学校、高校といった、発達段階に応じた「体験」をすること。それが１つの目的や目標を持つためのきっかけになると思う。学校では、そのきっかけづくりをどう教育課程に入れていくか、毎日の授業の中に入れていくかが重要だと思う。これは府立高校も同じであり、どのような体験の場を設定していくのかが求められている。

○地域によっては、小中一貫教育に加えて、保育園・幼稚園と小学校との連携にも取り組んでい

る。子どもたちの0歳から15歳までを通して見ているということ。これから重要なのは、高校の３年間を加えて、0歳から18歳までを１本の糸でつないでいくような視点ではないかと思う。今、小学校・中学校では、タブレットを１人１台使っている。そうすると、中学校の先生は、小学校でのタブレットの指導方法などを、理解していることが重要である。同様に高校の先生には、生徒たちが小学校・中学校でどのようにタブレットを活用してきたのかということを理解し、１本の糸のようにつなげていくことが今後求められると思う。これから府立高校が発展していくことと、小学校・中学校の義務教育との連携が進むことを期待している。

○今回の「在り方ビジョン」については、１つ１つの文言に非常に重みを感じる。目指す改革をそれぞれ進めるためには、大変な労力が必要だと想像する。これから具体的な計画や取組に落とし込んでいくことについては、一層の労力が必要だと思うが、しっかりと改革を進めていただきたい。

○この検討会議には、様々な分野から委員が選出されており、多様な意見によって自由闊達な議論ができたと思う。「在り方ビジョン」に対する教育委員会の熱意も感じることができた。

○新たな社会問題として、ヤングケアラーという子どもたちが増えているという報道もある。中学生では17人に１人、高校生では24人に１人という数字もある。様々な背景によって、介護を担わないといけない子どもたち、存分に教育を受けられる環境にない子どもたちがいるということを感じている。京都府として、福祉との連携や家庭教育の充実を図りながら、子どもを真ん中に置いてみんなで包み込んでいくような環境づくり、大きなチームで進めていく教育の在り方を検討していくことが必要である。

○検討会議に参画する中で、これからの府立高校に期待を持って見ていきたいという思いになった。府内の各高校や教育委員会が、子どもたちのことを考えて様々な取組をしていることを改めて感じた。中学生が高校を選ぶときに、何か魅力を感じて目的を持って選べるような、特色や特長のある府立高校であることが必要であると思う。また、全ての学校が、生徒それぞれが誇りを持てるような高校になればと思っている。

○高校の部活動で、サッカーの高校選手権や野球の甲子園大会といった全国大会に出場することは、その種目に励んでいる生徒たちにとっては夢である。そういったことに魅力を感じて頑張っている生徒たちもいる。府立高校が出場していると、思わず応援したくもなる。そのように、生徒にとって魅力的な学校となるよう、部活動も大事にしながら、学習内容も充実させていくことを期待している。

◆京都府に限らず、公立高校というのは、生徒たちが社会人の入り口に立つための準備の場であると同時に、地域にとってなくてはならない存在である。教育的な使命と同時に、社会的な使命を持っている。京都府は南北に長く、様々な地域がある。そういった地域に焦点を当てるということは、公立として当然あるべき姿だと思う。また、その地域社会というものを生徒たちの教材・教育資源として、生徒たちを伸ばしていき、さらに地域社会に役に立っていくという

ことが考えられる。京都府は探究的な学びがうまく根付きそうな地域性であると思う。

◆府立高校ならではの強みは、いろいろな連携ができるということである。地域社会や、私立・市立の高校、民間企業、各市町村、行政部局、大学などといった多様な主体と連携して、バリエーション豊かな体験を提供できるというのが、府立ならではの強みである。

◆教育活動のバランスの良さも、府立高校の強みである。学習と部活動との文武両道に学校行事を含めて、「２兎、３兎を追う」というバランスの良い教育が展開できるというのは、やはり府立ならではの強みだと思う。

◆高校の魅力づくりにおいては、これからの子どもたちの多様性に対応し、多様なニーズに沿った、多様な魅力づくりを展開していかないといけない。非常に大変なことではあるが、それが１人も取り残さない教育のための、公立の重要な役割である。

◆最終案を示して終わりではない。今回の検討では、短期的・中期的な課題が盛り込まれている。特に短期的な課題に対しては、具体的なアクションを起こして、府民が成果や変化を実感できるように具体的に進めてほしい。

□ビジョンの策定に向けて、本日の協議を参考にさせていただき、２月議会までに最終案としての「素案」の取れた形で確定をさせたいと思っている。最終案の確定に係る修正等については、座長と相談の上、進めさせていただきたい。最終案については、府議会で報告した上で、３月の府教育委員会会議において、議案として諮ることになる。教育委員会の議決をもって「府立高校の在り方ビジョン」を策定した際には、改めて検討委員の皆様にも御報告させていただく。

◆今後の最終案の確定に関しては、座長と事務局において相談の上、進めることとさせていただく。（異議なし）